

「生育」と「死む」の共存へ

小宮山 洋夫

森の中では、様々な樹木が葉を落としている。地

表に堆積した落ち葉は、ミミズ、ムカデ、ハサミム
シなどの小動物やバクテリアによって、食べられ、
分解され、形を失っていく。けれども消失したわけ
ではない。無機化し、土と化し、原初の世界へ戻っ
ていく。

そして、再び、植物の根によつて吸収され、茎、

枝、葉、花など、形あるものに変身していく。

この形を失う分解過程は、「くさる」といいかえ
てもよいだろう。「くさる」とは、形を失い、安定
した無機的世紀へ還つていくことだ。

落ち葉と違つて、水分の多い野菜の実など強い匂
いを発する嫌気性の「腐敗」はまさに「くさる」そ
のものだが、形を失う「分解過程」に含まれれる。

特集 〈くさる〉

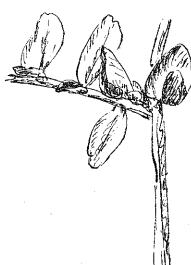
畑では、一生を終え、枯死した野菜は、落ち葉と同じように、自然の働きの中で、形を失い、「くさって」いき、土に戻る。

畑で生育する植物は、野菜だけではない。人が攪乱する場を好んで、住処とする、さまざまな草たちがいる。野菜を育てることは、草を招き入れ、生かすことでもある。さらにそれらと親しい間柄の、バクテリアや虫たちも。

早春、身をぢぢめ冬を越したホトケノザ、オオイヌノフグリ、ナズナが、小さく可憐な花をつける。

春が深まると、カタバミ、カラスノエンドウ、ツユクサ、アカザ、スペリヒュなど、色とりどりの花を開く。

畑の草は、種まきの前後は、ていねいに取り除く。けれども野菜が大株に生長すれば、草取りは、野菜が日陰にならない程度でよい。



カラスノエン ドウ

畑の夏の草の主役は、メヒシバ、オヒシバ、エノコログサなど、背を高く伸ばすイネ科植物だ。これらの草は、夏野菜の根の張りをよくし、株元の乾燥を防ぐ、自然が提供する優れた素材なのである。

自然の森や草原の植物は、病気になることはないという。それは多種多様な種が共生して、互いに生を健康に支え合う複雑で安定した関係が成立しているからだ。

畑は、单一の作物をつくることで、環境は単純なものになる。それで、病の温床になりやすい。

畑でのさまざまな草の生育は、自然の修復を意味する。畑の環境を複雑なものにして、病を追放す

る。

刈り取られたり、枯死した草は、畦道や原っぱの草を含め、森の落ち葉や、取り残された野菜とともに「くさる」ことで、原初の状態に復帰して、土となり、肥料となる。そして、畑を豊かにして、次代の生命の生育をはぐくむ。

畑の中では、野菜や草が生育するとともに、「くさつて」いく。「生育」と「くさる」が、共

時に共存している。それが健康で永続的な畑の姿なのだ。私たちは畑の草を、「雑草」と呼んではならない。

「雑草」の呼称の起源は、さほど古くはないだろう。それは、近代、自由と平等の理念のもとに、人間の平均像が形成され、そこから外れた者に対する差別の誕生と、時とともにいるにちがいない。

害虫、益虫の分類の虚しさを、すでに、ファーブル

は指摘している。

徹底的な除草は、畑から「くさる」過程を追放するものだ。そこには、ただ、「生育」＝「生産」だけが、熱病のように、追求される。

「くさる」が消えた畑には、他の場所で工業的につくられた化学肥料が投入される。そのような畑では、「循環」が切斷されている。ただ、直線的に、ひたすら前へ突き進んでいく。「死」が、「生」にながつていらない。



メヒシバ（左）
エノコログサ（右）

「くさらない」プラスチックの出現は、野菜の生産を、無季節化した。野菜の旬は、意識から追放された。

「くさる」過程の消去は、もちろん畠に止まらない。防腐剤、保存料の利用は、人間から、自然を感じ応する力を奪っていく。

「くさる」は、死からはじまる。生命あるものの「死」が自然の営みの中で、形を失い、カオスへ転化していく過程である。それは、自然の生命の循環の一過程である。「死」は、「くさる」ことによつて、次代の生命を支え、「生」を持続させる。



ホトケノザ

「くさる」は、ある気分の状態にも、使われる。滅入る、気力の低下など、体系だったものの崩れ。これは、形のしっかりと、秩序だった気分が、バラになるカオス的状態といえよう。

秩序は文化である。文化はもともと疑似自然である。不自然である。気分の「くさる」は、緊張から解放という働きがある。その時、内省も行われる。「くさる」気分が、時折、挿入されることによって、秩序だった気分の一定の持続が、保障されるのだろう。

(家庭菜園研究家)